

2003年 1月
講座

桂 秀実

文芸評論家

酒井直樹「過去の声」(以文社)

小熊英二「民主」と「愛国」(新曜社)

笠原和夫、聞き手・荒井晴彦、桂秀実「昭

和の劇」(太田出版)

「過去の声」は、いわゆる「朱子学的世界像の崩壊」以降の十八世紀に、日本近代の「死産された」発端を見る問題作である。今、日本の左派系若手研究者に強い影響力

を持つ著者の主著の翻訳だけに、多方面から検討されるべきだろう。

にもかかわらず、この書物について、江戸文学・思想史の専門家からのみならず、ほとんど書評(言及)があらわれないのは、どういふことか。

たとえば、本書のアクチュアリティを保証しているはずの「他者」概念が「大文字の」と形容され、しかもラカンのそれとは異なると言われる時、その概念の当否について、議論が必要だろう。

「民主」と「愛国」は、戦後思想史の再検討を膨大な資料を駆使することで目指した大著だが、今日の若い世代の研究者が、なぜ戦後民主主義への回帰を遂行しているのか、いぶかしく思っていた矢先だけに、いろいろと興味深かった。やはり、「戦後」という概念はフェティシズムの対象であり、
いまだ強力なのだと思った次第。

同様のことが、「昭和」という概念についても言えると思うのが「昭和の劇 映画脚本家 笠原和夫」。私も拙いインタビューとして参加しているが、あえて挙げた。本書の、かなりのリアリティを持った荒唐無稽を、実証的に論駁しうる者は存在するだ

ろうか。ともかく、この三冊は、われわれが置かれている歴史性を問うために、有力な手がかりを与えてくれることは、間違いない。